



# 宿り女

---

---

b-ryuf-b

---

## 宿り女〔やどりめ〕 人物表

---

治部新左衛門〔じぶ しんざえもん〕	26歳	村永藩藩士 馬廻組
犬飼平四郎〔いぬかい へいしろう〕	28歳	新左衛門の親友(谷本道場の同期) 徒目付
明乃〔あきの〕	19歳	犬飼の妻
与平〔よへい〕	50後半	犬飼の下男
谷本作兵衛〔たにもと さくべえ〕	55歳	道場主 治部・犬飼の師
篠井右京〔しのい うきょう〕	44歳	村永藩大目付(犬飼の上役)
四目主善〔よつめ しゅぜん〕	39歳	典医
政吉〔まさきち〕	29歳	桶屋
相良彦兵衛〔さがら ひこべえ〕	39歳	隠れ切支丹
葭江〔よしえ〕	30歳	相良の妻
佐橋半之丞〔さはし はんのじょう〕	37歳	大村藩 目付頭
筆屋 新八〔しんぱち〕	30後半	商人
オルガンティーノ	60前後	隠れ宣教師
ヴァリニアーノ	34歳	長崎で貿易に携わる宣教師

美濃 村永藩 城下町～長屋

字幕「嘉永二年（1849年）美濃 村永藩」

与平の誘導で、犬飼平四郎が走っている。

その後ろを、配下の者数名が息を切らせて続く。

犬飼「まだか？」

与平「あと2町ほどで」

角を曲がる。その先に人だかりが出来ていて、長屋の一つを囲んでいる。

犬飼は野次馬を掻き分けるが、中々入れない。

与平「徒目付〔かちめつけ〕さまだ、道を開けてくれ、通してくれ」

配下も到着して、ようやく野次馬の整理を始める。

犬飼「桶屋！...政吉というのはお主か？」

慎重に中を覗く犬飼。

投げつけられた桶が飛んでくる。

暗い奥に、恐怖に震える政吉がいる。

政吉「来るな！誰も来るな！」

犬飼「政吉じゃな？何もせん。話だけだ」

政吉「来るな！来るなァ！」

作業刀を振り回す政吉。痩せ細ったその左腿には、異様な膨らみが見て取れる。

犬飼「大人しくせい。お主の病気を見たいだけじゃ。手荒な真似はさせん」

政吉「来るな！入って来るんじゃねえ」

犬飼「...（与平に）錯乱しておるな」

与平「御坊が着きました。町医も呼びましたが、待たれるおつもりで？」

犬飼「いや、あの様子ではな...」

犬飼はさり気なく屋内を見渡し、外の様子を見て取る。籠屋を目に留める。

犬飼「かつぎ棒を借りて来い。見物〔けんぶつ〕を遠ざけておけ」

頷いた与平が手配を指示する。

犬飼は政吉の様子を窺いながら、一旦さがる。

政吉はギラついた血眼で呼吸荒く、腿を庇っている。極度の興奮状態だ。

犬飼の合図で、配下が長屋の板を壊す。

立ち上がって作業刀を構える政吉の背後から、長槍の要領で突き入れられたかつぎ棒の一撃が、政吉の後頭部をしたたかに打つ。

政吉が気を失って倒れる。

棒を放った犬飼が、政吉の体を調べる。

政吉の腿には、奇怪な痣〔あざ〕のようなものが浮き出ている。

巨大な火傷痕〔やけどあと〕にも見えるそれは、人の顔...

人面瘡〔じんめんそう〕だ。

犬飼「！...やはり」

陽光を浴びたソレは、その部分だけで生きてるように動き、顔をしかめて

赤子のように泣き声を上げる。

見物人から細い悲鳴が幾つも上がる。

配下に見物をさがらせて、与平が犬飼に耳打ちする。

与平「長屋の主人に確かめさせましたが、その顔は、桶屋の死んだ息子の顔だと」

犬飼「こ奴の子か。間違いないか」

与平「去年に流行病〔はやりやまい〕で...6つだったそうで。長屋のみんなで葬式を出してやったから、見紛うはずがない、と」

犬飼「...」

まだ泣き叫ぶ人面瘡を気味悪げに見やると、おぞましように布を被せる。

城下 篠井屋敷（夜）

篠井右京と四目主善が話している。

篠井「典医どのでも、判らぬか」

四目「心苦しいことながら」

篠井「しかし奇妙じゃ。奇妙極まりない」

四目「まこと、さようで」

篠井「御坊は仏罰と申す。地主らは土地神の祟りと申す。城下では人から人へ移る奇病と、噂になり始めておるのだ」

四目「病かどうか...それすらわかりかねておりますれば、みだりに騒がれぬようにせねば」

篠井「む...」

家人が犬飼の到着を告げる。通させると、犬飼が遠慮がちに入って来る。

犬飼「篠井様、遅くなりまして」

篠井「よい。それで？」

犬飼「は。（四目をチラと横目に見る）」

篠井「典医どのも存じておる。4人目じゃな」

犬飼「は。やはり近い者の顔でした。切り離しましたところ、断末魔を上げて動かなくなり、死色を浮かべる...これまでと同じでござり

ました」

篠井「桶屋とやらはどうなった？」

犬飼「町医に手厚く診させておりますが...長くはない、と申しておりました」

篠井「そうか...」

四目「私も後で参りましょう」

犬飼「4人に通ずる点がないか調べておりますが、未だ何も出ませぬ」

篠井「む。いずれ殿のお耳にも入れねばなるまいが...その方、引き続き調べに当たってくれ。くれぐれも内密にな」

犬飼「(平伏)かしこまりました」

同・門の表（夜）

四目を待つ籠まで送る犬飼。

四目「時に、奥方はどうじゃな？」

犬飼「(落胆)はあ。芳しくありませぬ」

四目「さようで。桶屋の後になるが、診てみましょう。役に立たぬかも知れぬが」

犬飼「いえ、お心遣い、痛み入ります」

四目「なになに、人面の病に比べれば、高熱など一時のもの。心配無用にございましょう」  
犬飼を元気付けて籠に乗る。

去っていく籠を、不安顔で見送る犬飼。

治部家（夜半）

灯火の薄明かりの中、治部新左衛門が、独り座してたたずんでいる。

どこからか、口の渴きを喘がせているような音が漏れている。

新左衛門「...（目を閉じたまま）」

無視を努めるが、音は絶え間なく耳に伝わり、反響している。

やおら刀を手にした新左衛門は、鞘を抜いて刀身を見つめる。

新左衛門「...（惑う）」

手が震えている。息が出来ない。

新左衛門「～～（嘆息）」

刀を鞘に戻し、荒々しく水場へ行く。

椀に水を汲んでくると、人目を憚るように衝立〔ついたて〕裏に回って、  
何やらゴソゴソしている。

障子越しで影しかわからないが、何かに水を飲ませてやっている様子だ。

犬飼家（夜半）

病に伏せる妻・明乃を看病する犬飼。

犬飼「養生していればすぐ良くなる。案ずるな」

明乃「申し訳ござりませぬ。これしきの熱で」

犬飼「言うな。元気になってくれれば、それでよい」

明乃「（弱々しく微笑む）はい」

部屋を出ると、与平が待っている。

与平「典医どのは帰られました」

犬飼「ご苦労。今日はもう下がってよいぞ」

与平「...」

犬飼「?...いかがした」

与平「調べが進んでも、これからが問題になるかと存じますので、先に申し上げておきたく、お許し願います」

犬飼「回りくどいな。何だ」

与平「これまでの人面には、死んだ身内や近しい者の顔が、生霊〔いきりょう〕のごとく浮き出ておりました」

犬飼「それだ。近しい者の顔ゆえ、食わせてまで面倒を見て、みな死に物狂いに隠しておったゆえ、見つけるのが遅れに遅れた」

与平「その顔の中に、実はまだ存命だった者がおりました」

犬飼「なに？すべて死者だったのではなかったか」

与平「3人目の時にございます。女の腹に現れた人面と同じ顔の男...確かに死んでおりましたが、それが、人面が現れたのと時を同じくし

て病臥についておったのです。男は丁度、女から人面を切り取った時分に死にました」

犬飼「死んだ？切り離れた時に、同時に、と申すのか」

与平「まぎれもなく。その男は、女の想い人だったともっぱらの噂でしたが、遊び人らし

く女をだまして食い扶持にしていたようです」

犬飼「生霊とは...そのようなことが」

与平「その死んだ男ですが、病などにかかった試しのない丈夫〔じょうふ〕でしたが、突然高熱におかされた由にて、町医が診たところ、

何の病かまるでわからぬ、と言われたようです。御内儀様〔ごないぎさま〕と同じように」

犬飼「なに！？...馬鹿を申せ。そのようなことが...そのような...（明乃を見やる）」

与平「御内儀様の病も、典医どのさえわからぬご様子。それがし、後々悔やまれるよりはと申し上げた所存」

犬飼「...（苦渋顔）...もし、もし仮にそうだとすれば、人面を持つ5人目が、既にいることになるのか」

与平「さようで。しかも、それは御内儀様のことを想ういづれか、となりましょう」

犬飼の手は、知らず刀柄を握っている。

重苦しい沈黙が垂れ込める。

谷本道場

字幕「数日後」

稽古場で、滝のような汗を流して修練に励む新左衛門。

その汗のかき方は、尋常ではない。一心不乱に基本の型を繰り返す。

そこへ犬飼が顔を出す。袷姿のままだ。

犬飼「おお、新左。久しいな」

新左衛門「！...（一瞬、言葉に詰まる）お久しゅうございます」

犬飼「（陽気）何をしゃっちょこぼっとるんじゃ、城でもないというに。儂とお主の仲ぞ。

昔のように平四郎でよい」

新左衛門「平四郎...さまも、先生に呼ばれたので？」

犬飼「そうじゃ。しかし、顔色が悪いが大丈夫か？儂も余り人のことは言えぬがな」

新左衛門「少々疲れただけでござる」

犬飼「どうも大事は重なる、というのは真じゃな。妙な事件を抱えたと思えば、家では女房が臥せってしまっておる」

新左衛門「明乃さまが...いかがなされたのですか？」

犬飼「熱を出してな。なに、大したことはないと思うが、新左が顔を見せてやれば喜ぶだろう。どうだ、この後でも？」

新左衛門「.....申し訳ござらぬが。それより、もう向かわれますか」

犬飼「そうじゃな。着替えずともよいのか、新左？」

新左衛門「はい」

竹刀を片付け、そのまま歩き出す。

新左衛門は極力、犬飼の顔を見ないようにしている。

犬飼「...（無表情、を装う）」

2人は続き廊下を無言で歩き、屋敷側へ行く。作兵衛の部屋に入る。

待ちかねていた谷本作兵衛は、弱々しく2人を手招いて並び座らせる。

谷本「よう来てくれた、2人共」

犬飼「ご無沙汰しておりました、先生。多忙とはいえ、申し訳なく」

谷本「よい、よい。其の方らを呼んだのは他でもない。折り入って、頼みがあるのだ」

新左衛門と犬飼が顔を見合わせる。

谷本「道場を、譲りたい。引き受けてくれぬだろうか」

犬飼「何を仰います、先生。先生は未だ剣客として鬘鑠〔かくしゃく〕としておられますのに」

谷本「端で見ると自ら悟るとでは違いもあろう。そろそろ、と自覚したからこそ、技量逼迫の其の方らに話しておるのだ」

犬飼「...先生」

新左衛門「...」

谷本「年寄りの勝手じゃが、どちらかに秘剣・奥義の一つも伝授して隠居するつもりだ。無論、其の方らにその意思あらばじゃが」

犬飼「勿体無き仰せです。ですが・・・」

新左衛門「(遮る) 師匠。誠に僭越ながら、その儀は犬飼様にこそ。それがしには荷が重いと存じますゆえ」

犬飼「馬鹿を申せ。儂は前々からお主に一步及ばざるを感じておったのだぞ。願ってもない話、無碍に断る奴があるか」

谷本は黙って様子を見ているが、新左衛門は平伏したまま顔を上げようとしない。

犬飼「新左！」

谷本「まあ待て。年寄りが急いたことも良くなかった。よくよく考えた上での返答を待つとしよう。気長にのう」

犬飼「(平伏) 恐れ入ります」

新左衛門を見やる。

新左衛門の面〔おもて〕には、何か堪えているような強張った固さがある。

犬飼「...」

同・門前～

急ぎ足で去って行く新左衛門。

陰から新左衛門をジッと見ていた与平が、門の中へ入って行く。

犬飼が道場から顔を出す。

与平「着替えもせずに逃げるように」

犬飼「...やはりおかしい。新左らしくもない振る舞いもある。だが、信じられぬな」

与平「消去法でございます。御内儀様を知る者の中で近頃様子が変わった者は唯一人。治部新左衛門のみ、でございます」

犬飼「む...だが」

与平「体調優れぬとして馬廻組勤めを休むこと5回に及びます。それも、御内儀様が臥せられた時期と一致しております」

犬飼「あ奴のことはよう知っておる。幼馴染だ。そのようなことをする男ではない」

与平「なればこそ。密やかに御内儀様と通じていたとか」

犬飼の形相が凄まじい険しさで与平を見据える。

与平「いえ、治部の独り思いとは存じますが」

犬飼「もうよい。わかった。新左を張れ」

与平「はッ」

人目を憚ってから、瞬時に姿を隠す。

犬飼は、ただ無言で考え込みながら、道場から去り歩いていく。

犬飼家～

床に臥せる明乃を看病する犬飼。

四目が診立てるが、首を振るばかり。

明乃は「心配はありませぬ」と夫に微笑みかけるが、すぐ苦しみに襲われて意識を失いかける。

犬飼は気が気でない。

× × ×

治部家。夜。表で与平が見張っている。

家の中では、衝立に隠れるようにして新左衛門が包帯を取り替えている。

包帯は左肩から二の腕にかけて覆い尽くすように巻かれている。

包帯を外すと、新左衛門はホッとしたような、しかし苦渋の色を浮かべる。

× × ×

詰所で配下の報告を聞く犬飼。

幾つもの報告を重ね合わせて吟味するが、心ここに在らず、という面持ち。

× × ×

町人長屋。筆屋に入って、新八に内職の品を預けている新左衛門。

与平は筆屋の様子を窺っている。

新左衛門は、新八に紙切れのようなものを手渡すが、与平の位置からは見えない。

× × ×

犬飼家。

明乃の病状は日増しに悪化している。

薬も受け付けずに吐き出し、布団を跳ねのけて悶え苦しむ。

家人たちは、呼吸さえ苦しげな明乃を見かねて顔を背ける。

× × ×

治部家。夜。

痩せ衰えた新左衛門。

対照的に、腕の膨らみが肥大化してきている。

包帯を外す新左衛門の顔には、やつれた不気味な笑みが浮かんでいる。

独り何やら呟く様子は、狂気に取り憑かれたかに見える。

× × ×

切り離された人面瘡の、その成れの果てを検分する犬飼。

台の上に順番に並べられた人面瘡は、

壱、若い女の顔。

弐、老婆と思しき顔。

参、若い男の顔。

四、子供（少年）の顔。

いずれもドス黒く、断末魔の苦悶を張り付かせており、醜悪極まりない。

犬飼の脳裏に、「五」の札を貼られた新たな人面瘡が浮かぶ。



それは妻・明乃の苦悶の顔を醜く写しとった物体として陳列されている。  
その人面瘡が動き出し、「あなた」と声を発する。  
犬飼は、おぞましい妄想を振り払うように頭を振る。  
手は知らず刀を握っているが、犬飼は気付かず人面瘡を凝視し続ける。

× × ×

与平は筆屋を見張っている。

荷物を抱えて出掛ける新八の後を追って動き出す。

城内 詰所（夕刻）

犬飼が検分書作成に追われている。

そこへ、配下の者が火急の知らせを持ってくる。

配下「犬飼様、御内儀様が危ういとの知らせが」

犬飼「何？真〔まこと〕か」

配下「すぐにお屋敷へ戻られるように、と」

机を弾き飛ばして走り出す犬飼。

犬飼家（薄闇）

四目が明乃を診ているところへ、犬飼が入って来る。

犬飼「（焦る）典医どの。明乃は？明乃はどうなのですか？」

四目「（嘆息）手の施しようもなく...医師としてお恥ずかしい限りでございます」

犬飼「そのような...まさか...」

以前より痩せ衰えた明乃は、もう息をしているのがやっとの状態で喘ぐ。

熱に侵され、体をよじる明乃。

その胸元（心臓の位置）に、十字に似た痣が浮き出ている。

犬飼「典医どの、この痣は？」

四目「丁度、御内儀の心の臓が止まりかけて犬飼様を呼びにやらせた頃に、気付けば浮き出てまいったようで」

犬飼「これが、病の元なのですか？」

四目「わかりませぬ。このような...私などの理解の及ぶところではございませぬ」

呆気にとられて明乃を見る犬飼。

明乃の呼吸は切迫しつつある。

治部家（宵）

苦悶の喘ぎが漏れ聞こえてくる。

薄暗い寝屋の中で、病的に痩せ衰えた新左衛門が苦しみもがいている。

与平は床下に潜み、慎重に様子を窺っている。

新左衛門「ぐぁッ・・・が、あああああああ」

新左衛門の苦悶が一層激しくなる。

服をはだけて包帯をむしり取る。

そこには、膨れ上がった瘤〔こぶ〕が出来ている。

その瘤は、人の顔の大きさほどもある。

淡い灯火が映し出した瘤は、紛れもなく明乃の顔をした人面瘡だ。

与平からは人面瘡が判然としないが、与平は懐から小刀を抜いている。

新左衛門「...あき、の、どの」

苦しげに呟く声が聞こえる。

新左衛門は刀を抜いて、人面瘡に刀身をあてがう。

悲壮な色を浮かべ、人面瘡の明乃の顔に眼を見開いている。

新左衛門「明乃、どの...」

与平「... (やはり)」

与平は音を忍ばせて床に上がる。気付かれてはいない。

新左衛門は、息も切れ切れに目を固く閉じ、刀の柄を持つ手に力を込める。

大きく成長した人面瘡は、明乃そっくりの顔をグイともたげて新左衛門の顔を見る。

新左衛門は涙を流している。

与平から人面瘡の顔が見えた。確信する。

与平「... (こ奴が元凶!)」

小刀を構えて、にじり寄る。

人面瘡は、新左衛門の顔を見つめて口を動かす。

それは叫ぶように大きくなる。

想像を絶する激痛が新左衛門の身体を襲い、のけ反らせる。

与平が襲いかかろうとした、その時、

新左衛門「ごあああああああああ　・・・」

家を揺るがすほどの絶叫に、与平の動きが止まる。

そして、与平の目は信じられない光景を見る。

人面瘡は急速に膨れ上がって、まるで新左衛門の体から抜け出してくるかの  
ように『人』の形を作っていく。

新左衛門「主よ...」

余りに小さな呟きは、別の音にかき消される。

骨が軋み、筋が象〔かたど〕られ、肉がこすれ合い、血がしたたる不快感が  
低く鳴り響き、新左衛門の苦悶の叫びと重なる。

与平は、耳を塞ぎ、目を疑う。

与平「お...おお...」

不快感に、女の苦悶の声が混じる。

新左衛門は息すら出来ず、死ぬほどの激痛に耐えている。

その腕から抜け出してくる『何か』は、徐々に人の姿になっていく。

× × ×

明乃の症状は膠着していたが、突然痙攣が始まり、止まらなくなる。

犬飼「明乃...明乃! しっかりしろ」

四目にも手が付けられない。

痙攣が、糸が切れたように止む。

犬飼「...明乃? あき、の」

四目が呼吸と心臓を確かめる。

四目「残念ながら...」

犬飼「明乃? 明乃? ...」

重苦しい沈黙が支配する。

× × ×

もと人面瘡だったモノは、遂に『人』の姿になる。  
新左衛門の体から完全に抜け出たソレは、髪を振り乱した裸身の女。  
その顔は、明乃そのもの。

与平「な...（動けない）」

新左衛門は、ようやく息をついで、ふと我に返る。  
目前の光景が脳で理解されるまで、一瞬の沈黙ののち...  
目に入ったのはかつて腕にあった明乃の顔と、自分の刀と、与平だ。

新左衛門「...（刀を拾う）」

瞬間、跳躍している。与平の脳天へ切り下ろす。  
与平はわずかに気付くのが遅れたため、小刀ごと肘先から右手を失う。  
だが、素早い身のこなしで外へと逃げおおせる。

新左衛門「...（振り返る）」

半身を起こした女（明乃と瓜二つの姿かたちをした、もと人面瘡）が、  
新左衛門を見上げる。

新左衛門「...（恐怖）」

柄を握り直す。左手で十字を切り、右手の刀を振り上げる。

犬飼家（夜）

明乃の亡骸を前に悲しみに暮れる犬飼。  
家人が急を告げるのを押しのけて、右手を失くして血の気がない与平が  
よろめきながら現れる。

犬飼「与平！いかがした？」

与平「申し訳ございませぬ、旦那様...」

そのまま倒れこむ。

犬飼は四目を呼び戻すように指示して、与平を介抱する。

与平「面目、ございませぬ...某、一生の不覚」

犬飼「すぐ典医どのがくる。何があった？」

与平「御内儀様は？」

犬飼「.....身罷〔みまか〕った。そこに」

犬飼越しに明乃の遺骸〔なきがら〕を見る与平。

与平「治部の、腕から、御内儀様が...」

犬飼「?...何を言っておる？」

与平「治部に、人面が...御内儀様に、相違なく...人面は、人と...なって」

犬飼「新左に人面！それは真か？」

辛うじて頷く与平。

犬飼は、四目と入れ替わりに与平を託して、家人を配下の者の元へ  
走らせると、自ら帯刀して走り出す。

治部家（夜）

荒れ果てた感の居間に立ち尽くす犬飼。  
小刀を握った与平の右手が落ちている。  
他は何もない、誰も居ない、もぬけの殻だ。

遅れて到着した配下の者たちに提灯を手に隈なく散策させる。

だが、屋内にも周囲にも誰ひとり居ない。

犬飼「...（苦渋）新左」

祭壇に置かれた、使い古された小さな木剣を見つけて手に取る。

懐かしむ犬飼の脳裏に、幼い頃の自分と新左衛門、そして明乃の声がする。

木剣で打ち合う音。

「よし、僕の勝ちじゃ」

「拙者の方が早かったぞ」

「いや、真剣なら僕の太刀が新左の腕を落としている」

「判るもんか」

「明乃はどう見た？」

「ん～、技の平四郎さま、力の新左さま、かな？」

「それみろ」

「まだだ、もう一回」

「何度でも」

「頑張って」

幼い明乃の楽しそうな掛け声と、幼少の頃の2人の打ち合う音が、  
いつまでも聞こえてきそう。

配下「犬飼様。やはり何も見つかりませぬ」

やっと我に返る犬飼。

犬飼「探せ。まだ遠くには行けぬ筈じゃ。人相書きも出せ。隈なく探すのだ」  
木剣を元に戻し、配下に指示を与える。

町人町

河原の立札に、新左衛門の人相書きと手配書が記されている。

見物の人だかりの中から、オルガンティーノ（虚無僧〔こむそう〕姿で、  
天蓋〔てんがい〕で顔を覆い隠している）が立札を眺めている。

犬飼家 葬式会場

明乃の葬儀が執り行われている。

棺に入った明乃の亡骸に、家中の者たちが参列して焼香していく。

喪主席の犬飼の元に、篠井がやってくる。

篠井「城下に噂が広がっておる。治部新左衛門の話は真か？」

犬飼「目下、探索させております」

篠井「見た者は」

犬飼「当家的下男で与平と申す者です。手傷を負ったので、まだ詳しくは」

篠井「信用できるか、そ奴」

犬飼「元忍びの者。迂遠〔うえん〕な言〔げん〕は弄〔ろう〕ませぬ」

苦りきった顔の篠井をヨソに、犬飼は考え込んでいる。

町人長屋～屋敷町

道行く人が物珍しげに足を止める。

かつて人面瘡だった、明乃の顔をした女が歩いている。

結えないままのざんばら髪で、放心した顔つき。薄着一枚を着崩し、

痴呆のように力なくゆったり歩む姿は、あまりにも異様な光景だ。

その先の方向には、犬飼屋敷がある。

筆屋

凄まじい剣幕で新八を問い質す新左衛門。

新左衛門「どこへ行ったかと訊いておる」

新八「わかりやせんよ、気付いたらもう」

新左衛門「心当たりはないのか！」

新八「そう言われましても...話したことと言えば、これから葬儀をする犬飼さまの御内儀とそっくりな顔だって...でも、何を話しかけても、だんまりでしたし」

焦る新左衛門。刀を手に飛び出す。

新八「ちょっと、旦那！アンタ手配書が回ってるのに...旦那！」

店の奥側から、潜んでいたオルガンティーノが顔を出す。

新八「あ、オルガ様、こっちは店側で」

オルガンティーノ「スグここを離れる。あの2人が戻ったら、湖南回廊へ案内いたせ」

新八「え？でも」

オルガンティーノ「もはや見られずには済むまい。隠れ家を何箇所か用意しておいた。村永藩の領内を出るまでは、お前が面倒を見るのだ

」

新八に地図を手渡す。

犬飼家 葬式会場

葬儀が続く。読経が低く流れている。

篠井「その治部新左衛門を捕らえれば、この人面騒ぎは解決すると申すのか」

犬飼「...必ずや」

入口辺りから鋭い悲鳴が上がる。

読経が止み、みなが振り向くと、そこには明乃の顔形をした女がフラフラと歩いてくるのが見える。

犬飼「な・・・なんじゃと...」

参列者の中から、

「犬飼様の御内儀だ」

「明乃さまだ」

「死んでおらぬのか」

などの声が上がる。

呆気に取られる人々の中を悠々と進んだ女は棺を覗き込み、無造作に亡骸をつかみ上げる。

亡骸の顔と、それをつかみ上げた女の顔は、完全な瓜二つ。

共に明乃だ。

犬飼「な・・・何奴！」

刀を抜こうとするが、金縛りにあったように体が動かない。

女は明乃の亡骸の顔を見つめ、その唇を吸う。

参列者の中の女性が何人か失神する。

誰も動けない状況の中で、また鋭い悲鳴が上がる。  
血相を変えて現れた新左衛門が、抜身の刀を振り翳〔かざ〕して分け入り、  
棺の前に現れる。

犬飼「新左...」

新左衛門は、亡骸に噛み付こうとしていた女を引き離して脇に抱え、刀を  
構え直してぐるりと睥睨〔へいげい〕する。

新左衛門「...（凶暴な獣の如く）」

犬飼と目が合う。

異様にギラついた双眸〔そうぼう〕は、何の感情も示していない。

その時、新左衛門の胸元から零れ落ちて見えたのは、十字架〔クロス〕の  
ペンダント。

犬飼「！...」

新左衛門は身を翻して幕を切り裂き、猛然と通りを駆け抜けて行く。

ようやく刀を抜いた犬飼がその後を追う。

篠井「何をしておる、人を集める！犬飼を追いかけて助けるのだ、早ようせい」

茫然自失していた人々が、やっとのことでわらわらと動き出す。

新左衛門と犬飼はもう遥か遠くにいる。

残されたのは、棺からはみ出してしまった明乃の無残な亡骸のみ。

逃げる新左衛門 追う犬飼

人間を抱えているとは思えない驚異的な速さで駆け抜ける新左衛門。

抜身を持って走る異様な姿に、誰もが慌てて道を譲る。

犬飼は必死に追いかけるが、差は逆に開いていく。

犬飼「新左アーツ！」

長屋や商店が入り乱れる区域に入ったところで、見失う。

道行く人に聞くが、一向に要領を得ない。

犬飼「新左！どこへ行った？話がしたい！出て来い、新左！新左アツ」

叫び空しく、周囲は日常の喧騒を取り戻している。

膝を折り、屈辱に震える犬飼。

犬飼「おのれ・・・おのれ、おのれえ...」

食い縛った唇から血が流れ落ちる。

治部家（夕刻）

徹底的な家捜しが行われている。

犬飼も、血眼になって証拠を探している。

ふと、祭壇の木剣を目に留め、手に取ってみる。

犬飼「...（角度を変えて見る）」

目抜釘と割目がある。それを外すと、中から極小のキリスト像が出てくる。

犬飼「切支丹〔キリシタン〕...そうであったか、新左よ」

木剣を床に投げつける。

怒りに震えている。配下の者たちに、

犬飼「これまで人面の病が出た者の家を探し直せ。これと同じ物が出てくるまで、柱を  
裂いてでも調べ尽くすのだ」

配下たちが散っていく中を、与平が現れる。

まだ蒼白で、右手の肘から先は無い。

与平「旦那様」

犬飼「与平、もうよいのか？」

与平「掛かる事態に寝てなどおられませぬ。どうかお側に」

犬飼「む、助かる。しかし、わかったことと言えば、まだこれだけだ」

与平に像を投げ渡す。

受け取る与平は会心の笑みを漏らす。

与平「ご安心召されませ。治部に助力した筆屋新八なる者、既に捕らえてございます」

犬飼「筆屋じゃと？そ奴も」

与平「隠れ切支丹に相違なく。治部らを逃げ延びさせた後で戻って来たようですが、愚かにもまだ手形を持っておりました」

犬飼「どこじゃ？」

与平「湖南回廊。三上藩の所領が当面の行先かと。そこから外海へ出るか、京に潜伏を図るか...いずれであろうと、追えます」

犬飼「よくやってくれた。急ぎ出立を支度せい。寄騎は少なくてよい、先方にも話を付けておかねばならぬ」

与平「某は後から参ります。筆屋から根こそぎ聞き出しておかねばなりませぬ」

犬飼「...(にらむ)責は全て儂がとる。なにをしてでも全て聞き出して、儂に伝えよ」

与平「かしこまりました」

街道～

軽装だが旅支度をした犬飼、以下数名の目付らが出立していく。

馬を駆って、湖南回廊を目指す。

三上藩領内 禅寺(夜)

琵琶湖畔の賑わいを離れた閑静な丘陵地に、ひっそりと建つ寺。

中では虚無僧姿のオルガンティーノが、新左衛門と向かい合っている。

明乃の顔をした女は、隅に座ってほうけたように体を揺らしている。

オルガンティーノ「無事で何よりだった。さぞ難儀であったろう」

新左衛門「(十字を切る)数々のご助力、かたじけのうございます」

オルガンティーノ「全ては主のお導きによるもの。謝意はよい、祈りを捧げることだ」

新左衛門「はい。それにしても、訳がわかりませぬ。一体なぜ、あのような」

女を振り返る。

女は灯火に寄ってきた虫と戯れている。無表情で、邪気が無い。

新左衛門「明乃どのが身罷られて、あの女が拙者の腕から現れ出てきた、などと...オルガ様には、おわかりになりますか？」

オルガンティーノ「神のご意思を計り知ることは容易でない。だがかような現象、耳にしたことなど無い。これは治部どのに授けられた、

新たな試練であろう」

新左衛門「試練、でございますか」

オルガンティーノ「さよう。主の為されることに意味の無いことは一つも無い。あらゆる事柄は、大局へと繋がる」

十字架を手にして祈り始める。

新左衛門もそれに倣う。が、ふと外に気配を感じて刀を手にする。

オルガンティーノ「待て。私が呼んだ者たちだろう。入りなさい」

相良彦兵衛と葎江が入ってきて、祈りの手を合わせる。

オルガンティーノが2人に十字を切って見せる。

新左衛門「は... (刀を置く)」

オルガンティーノ「相良どのと、妻の葎江どのです。これからの道案内を頼みました」

相良「(クロスを見せる) どうぞ、よろしく」

新左衛門「こちらこそ、かたじけない」

オルガンティーノ「彼らは和歌山に伝〔つて〕がある。そこから長崎へ渡るがよろしかろう」

新左衛門「長崎、でございますか？」

オルガンティーノ「長崎にて我らの船に乗られるがよい。信仰厚きかの地まで、きっと送り届けましょうぞ」

新左衛門「は。何卒」

オルガンティーノは立ち上がり、天蓋を被って寺を出て行く。

一瞬、相良と目を交わすが、そのまま闇へと去って行く。

葎江は持参した馳走を女に差し出す。

葎江「さあ、お食べなさい」

女「?... (つつく、そして食物と気付く)」

作法も無くむしゃぶりつく。その野生の如き有様に、葎江や相良が笑う。

相良「よい食べっぷりですな」

新左衛門「(嘆息) 面目ない」

村永藩領内 詰所(夜)

新八を尋問する与平。

猿轡〔さるぐつわ〕を噛まされて縛り上げられた新八は、既にかかなりの拷問を受けている。

与平「其の方ら切支丹のつながり、全て話せ。さもなくば地獄を見せる」

猿轡を外す。

新八「言い掛かりだ。お上に、訴えさせてもらいましょう」

与平「まだ粹がるとは流石だな。信仰とはそれほどのものか」

新八「商人は、金の他は信じませんよ」

与平「いいだろう。暇が惜しいゆえ手間を省く。殉教とやらをさせてやろう」

配下に指示して新八を逆さに吊るさせる。

その際、針の用意をさせて、更には内臓が下に下がらないよう独特の縛り方をさせている。

新八「(不安) 一体、何を？」

与平「貴様らは磔刑〔たっけい〕をすると逆に喜ぶと聞いておる。信仰する神と同じ苦しみを味わえる至福だ、とな。だが、これは逆だ」

逆さに吊られたまま、新八は深く掘られた穴の上まで移動される。

与平「穴吊り、という刑を聞いたことがあるか？」



新八「... (目を瞠る)」

新八の耳朶〔みみたぶ〕やこめかみに、針で穴が開けられる。

小さく血がにじみ出てくる。

与平「内臓が下がると死ぬのが早い。頭に充血しても同じだ。それが出来ぬようにした。これで糞尿や腐り物の詰まった穴に突っ込ませる

。長いぞ、死ぬまでが」

新八「！・・・い、いやだ」

与平「七日、いや十日ほどか...逆さで死ぬゆえ、地獄行きとなろう。切支丹にとって、これ以上不名誉な死に様は在るまい」

新八「おのれ、それでも人か」

与平は新八の口に草鞋を履いた足を突き入れて、踏みつける。

与平「禁教令を破ってまで信仰するからには覚悟があるのだろう。見せてみる」

合図で新八は半分以上穴に入れられる。

配下の者たちが、鼻をつまみながら鍋などを叩いて騒音をたてる。

与平「(配下に) 休み無く交代で続けよ。一刻も早う犬飼様にご報告せねばならぬ」

肘から先が無い右手を見つめる。

三上藩領内 禅寺(夜)

食事を終えて片付ける新左衛門。

相良が小瓶からワインを注いで渡す。

新左衛門「これは、葡萄の？」

相良「オルガ様より分けて頂きました」

新左衛門「よいのですか？」

相良はもう飲んでいる。

女は葎江に食事の汚れを拭いてもらっている。まるで赤子だ。

仕方なく、新左衛門も飲む。不味い。

相良「(笑) 向こうでは飯の度に飲まされるそうです。今から慣れておくことですな」

新左衛門「...あれは、何もわかっておらぬ。生まれたての赤子も同然。連れて行ってよいものか、まだ」

相良「ふむ。では、どうされます？」

無邪気に葎江に甘える女を見やる。

相良「捨ておくか...殺してしまうか」

新左衛門「(陰しく) そのような...出来はせぬ」

相良「よいではないですか。これは主の思し召したもうたこと。人は誰も運命には逆らえぬものです」

新左衛門はため息を漏らして女を見やる。

相良「明日は山越えです。追っ手を撒かねばなりません。治部どののご友人を」

新左衛門「犬飼が？」

相良「貴方を殺そうと並々ならぬ執念を燃やしておるそうにござる」

新左衛門「...是非も無い」

相良「さ、今日は休みましょう。奥を使うとよいでしょう」

新左衛門「では、我らは」

女の手を取ろうとするが、女は新左衛門を振り払い、警戒して獣のようになる。

葎江「どうしたのでしょうか？」

新左衛門「今までもこの調子で...某が触れようとするこの有様だ。相済まぬが、奥方ど  
のと一緒に居させてやってもらえぬか」

葎江「ええ、私は構いませぬ」

女は葎江には素直に従い、布団を敷くのを邪魔してはしゃいでいる。

新左衛門は失礼して奥へ向かう。

河内 狭山藩領内

山中の険路を渡る新左衛門たち。

相良の先導についていく新左衛門。

女は葎江にピッタリくっついて、楽しそうにしている。

新左衛門「... (少々複雑な思い)」

三上藩領内 湖畔の町

旅籠〔はたご〕の別室を、犬飼らが借り切っている。

旅装のまま配下の報告を受けている犬飼。

配下「湖岸の船を使った形跡はありません。京への街道でも、それらしい女連れを見かけ  
た者はありません」

犬飼「...ここへ来ていない筈はない。新左・・治部が頼りとする者は多くない」

配下「は。引き続き探索致します」

苛立つ犬飼。部屋を右往左往する。

そこへ早馬が到着する。村永藩からの使者が通達を犬飼に渡す。

使者「与平どのより、これを」

犬飼「... (読む) 与平はいかがした？」

使者「先回りして足止めせんとす、と」

犬飼「(会心の笑み) よくぞ。儂も紀伊に向かう。者どもには後から来るよう伝えよ」

近くに居た数名のみ引き連れ、すぐさま馬を駆る犬飼。嬉々としている。

和泉 岸和田藩領内・沿岸(薄闇)

岸を見下ろす丘縁〔おかべり〕に到達する新左衛門たち。

遠くに小さく一艘の幌船が見える。

相良「あれです」

新左衛門「ここは、まだ和泉ではないか」

相良「交易は和歌山藩でしておりますが、人目につくわけに参りませぬ。ここが最良の地  
だったのです」

海を見てはしゃぐ女を、葎江があやしている。

丘縁を降り始める相良に続く新左衛門。

新左衛門「? ... (音に気付く)」

礫〔つぶて〕が飛んでくる。

危うく避けてから、急ぎ女と葎江を伏せさせる。

新左衛門「伏せろ！」

相良「え？」

雨霰と礫が襲ってくる。

相良は脚と側頭部を直撃されてドッと倒れる。致命傷だ。

新左衛門は、瞬きせず宙を見据えて様子を窺う。

2方向から襲ってきている。その端、海側を注視すると、叢〔くさむら〕で火花が散っていることに気付く。

新左衛門「ここを動くな」

迷わず火花へ突進すると、抜きざまに切る。

黒衣の男の首が宙を舞う。

落ちた火種が油に引火して、炎の輪が新左衛門たちを囲む。

炎から離れて気配を窺う新左衛門。

一方から鎖鎌〔くさりがま〕が襲ってくる。

別の方向から手裏剣が襲い掛かる。

新左衛門は鎖鎌が放たれた地点を目算して、まっしぐらに駆ける。

鎖鎌の第二撃は距離が無く、新左衛門の肩に当たる。

構え直す隙を与えず、黒衣の男を袈裟懸けに切り伏せる。

新左衛門は、飛んでくる手裏剣を辛うじて躲して、刀を構える。

炎を背にして、小柄な男が立ち上がる。

与平「やりおるわ」

新左衛門「どうあっても邪魔立てするか」

与平「船に乗り込むを見計らおうと思ったが...どうにも疼いてのう」

切られた右手を見せる。

対峙する。新左衛門も与平も、互いの隙を窺って動けない。

伏せていた女は、葎江を押し退けて立ち上がり、泥を払い始める。

葎江「ちょ、ちょっと」

与平が女を意識した瞬間に、新左衛門が動く。与平が素早く追いつがる。

新左衛門は相良の体を起こして、その尻を与平へ向けて蹴飛ばす。

まだ辛うじて息のあった相良は、与平に抱きつく。

振りほどく間を与えず、新左衛門は寝転んだ態勢から相良ごと与平を突く。

相良の腹を突き抜けた刀は、与平の心臓を抉っている。

与平「のがしは、せぬぞ...」

与平が死ぬ。

新左衛門は刀を納めて、相良の亡骸を丁寧に寝かせて十字を切る。

葎江「相良は」

新左衛門「既に助かる道は無かった。されど某を恨む気持ちがあるう。これからどうするか、ご自身で決められよ」

葎江は相良に十字を切ってから、フラついている女を支えて、キッパリと、

葎江「長崎へ、ゆきます。私も」

新左衛門「...」

船へ向かう。

女「... (新左衛門の後を付いていく)」

葎江も慌てて後を追いかける。

× × ×

朝方。ようやく到着した犬飼ら討手一行は、船着場の探索に取り掛かる。  
犬飼は、与平の亡骸の傍らに膝を付いて、悔し涙を振り絞る。

犬飼「おのれ・・・おのれえ...新左めが」

船着場から配下の者が戻ってくる。

配下「瀬戸の商船が六ツ頃に出たようです」

犬飼「(与平を)丁重に葬ってやれ」

与平の脇には相良の亡骸が転がっている。

相良の胸には十字架が握られている。

犬飼はそれを見ると、ふいに湧き上がった憎悪に抜刀して十字架を突き刺す。

犬飼「切支丹めが...行先はわかっておる。すぐ船を用意致せ。長崎までじゃ！」

刀を引き抜く。切先に刺さった十字架から血が滴り落ちる。

西日本地図

新左衛門らの乗る商船は瀬戸内海から関門海峡へ抜け、長崎へ向かう。

犬飼ら討手一行の調達した幌船は太平洋側から長崎へ航路をとる。

商船 船上

海にかもめに、空に雲に、と一々指差しては一喜一憂してほうける、  
明乃の顔をした女。

女を見つめる新左衛門。

刀を常に手に抱え、甲板に座り込んでいても警戒を緩めない。

新左衛門「... (思い出している)」

...イメージ。かつての明乃の姿。顔。

笑った顔。拗ねた顔。怒った顔。泣いた顔。思いつめた顔。恥らった顔。  
顔、顔...

新左衛門や犬飼を呼ぶ声...

そして、棺から転げ落ちた死に顔...

その横に立っていた、あの女...

新左衛門は固く目を閉じて頭を振る。

葎江「治部様、治部様！」

葎江の呼ぶ声に辺りを見ると、女が甲板から身を乗り出し過ぎて海に  
落ちそうになっている。

船が波に揺さぶられる。

慌てて助けに行く新左衛門。

同・船内船室(夜)

狭い室内で着のまま横になっている新左衛門。

その目は宙を彷徨〔さまよ〕っている。

そこへ、突然忍び込んでくる葎江。

新左衛門「何のつもりだ？」

葎江「あのおなごはもう寝ております。ご安心下さいませ」

新左衛門「よさぬか」

葎江「不義には当たりませぬ。あれはもう居りませぬゆえ」

妖艶な笑みを浮かべた葎江を拒絶して、居住まいを正す新左衛門。

葎江は構わずにしなを作る。

葎江「それとも、あの娘の方がよろしい？」

新左衛門「(にらむ)たわむれを」

葎江「お怖い顔をなさらないで下さいまし」

新左衛門「...」

葎江「想いに焦がれた女と瓜二つでございましょう？抱きたくなって当たり前ではないですか。元はここに住んでいた、モノ」

新左衛門の腕の、抉れた傷痕をさする。

そのまま着崩しながら、唇を近づける。

新左衛門「離せ！」

葎江を突き飛ばし、刀を手にする。

葎江「怖いのですか？」

新左衛門「何だと」

葎江「私が、ではありませぬ。あの女が、恐ろしいのではないですか？」

新左衛門「... (目を背ける)」

葎江「外法〔げほう〕により生まれし者...命あって無き者...あれは真に主の思し召しであるか、と疑っておいでではないですか？」

新左衛門「...」

葎江は含みを残して笑い去って行く。

新左衛門は刀を置き、息をつく。

同・甲板

舳先に座り、海を眺めやる新左衛門。

女の駄々をこねる声がある。振り向くと、葎江は態度を一変させて女を冷たくあしらっており、女は葎江に構ってもらおうとしている。

新左衛門「... (嘆息)」

長崎 浦上

葎江の先導で町を歩く新左衛門。

女は、今度は葎江を警戒するようになり、新左衛門の腕にしがみ付いて「ウ～」とか「ア～」とかうなっている。

葎江は女を振り返って冷たい一瞥を送ると、すぐ歩き出す。

新左衛門「... (嘆息)」

山寺 本堂～地下聖堂

僧たちが読経する中を、住職に案内されて奥へ向かう葎江。

ついて行く新左衛門と女。

御本尊の裏手の隠し扉を開けると、地下への通路が現れる。

燭台を手に通路を進む住職に、葎江と新左衛門と女が続いて行く。

洞穴には通風孔用途の穴が無数にあり、通路の先に光が見える。

住職はそこに留まり、新左衛門らは先へ進むと、開けた大部屋に出る。

新左衛門「!・・・これは」

そびえ建つマリア像が採光の後光で神々しく輝き、老若男女の百姓や

町民たちが像に祈りを捧げている。

葎江と新左衛門はその場にひざまずいて祈る。

女だけが、キョトンとしている。

ヴァリニアーノが新左衛門を見つけて近づいてくる。

ヴァリニアーノ「治部どの。よくご無事で」

新左衛門「お久しゅうございます、バリニ様」

ヴァリニアーノは女を見て顔を険しくする。背後の者たちへ合図する。

黒衣の僧たちが女と葎江を拘束する。

新左衛門「何をなさるのです、バリニ様！」

ヴァリニアーノ「外法を用いし異端の者どもよ。審判が下るのを待つがいい」

困まれ、動けない新左衛門。

長崎 浦上の漁港

幌船から降りてくる犬飼たちを、大村藩の縛使たちが物々しく出迎える。

その中から、佐橋半之丞が犬飼を呼ぶ。

犬飼「そも、これは何事か？」

半之丞「犬飼どの、ですな。貴藩大目付、篠井様より言付かっております。隠れ切支丹の探索、及ばずながらご助力致そう」

犬飼「おお、それはかたじけない。与平め、そこまで手を回してくれたのだな」

感激する犬飼。その命令を待つ配下。

犬飼「して、切支丹めらの居場所はどこか」

半之丞「お任せあれ」

港 ポルトガル船（夜）

黒衣の武装集団が指示を待ち、集っている。

新式ライフル銃を持つ者までいる。

オルガンティーノ「よいか。女さえ無傷であれば良い。他は意に介さず」

武装集団が夜陰に乗じて出撃する。

オルガンティーノ「宿願、達せらるるべし」

喜悦の笑みを浮かべる。

地下聖堂（夜）

簡易牢に入れられている新左衛門と女。

ヴァリニアーノが訪れる。

ヴァリニアーノ「手荒な真似をした。済まぬ」

新左衛門「訳をお教え願いたい」

ヴァリニアーノ「我らが真の目的は邪教に堕ちた異端の者を抹殺せしめること。それ即ちオルガンティーノなり」

新左衛門「！...オルガ、様が、邪教の？」

ヴァリニアーノ「さよう。オルガンティーノは今や悪魔崇拝者〔サタニスト〕だ。外法を用いて邪〔よこしま〕な神の復活を目論んだ。その母体、容れ物となる者を生み出すため、虐げられた故に異常な信仰を持つに至ったこの地を選んだ」

新左衛門「邪の神の、容れ物とは？ まさか・・・」

明乃の顔をした女を見やる。

女はほうけて天井を見上げている。

新左衛門「この者は拙者の腕から生まれいでた...そのような外法を、いつ？」

ヴァリニアーノ「洗礼の儀式に託〔かこつ〕けて、念を施したのだろう。お主と、明乃どのにな」

新左衛門「！（洗礼の儀式を思い出す）」

明乃と共に儀式を授かった記憶...

オルガンティーノは、明乃と新左衛門に特殊な陣形上での儀式を執り行った...

念を送られた明乃と新左衛門はその場に倒れ、喜悦の色を浮かべたオルガンティーノが高らかに笑っている...

新左衛門「それでは・・それでは、明乃どのの死は、邪教徒の仕組んだ外法がため...」

怒りに震え戦慄〔わなな〕く手を必死に抑える。

ヴァリニアーノ「すぐにも奴の手の者らが来よう。これを持っていなさい」

新左衛門と女に、透明な液体の入った小瓶を渡す。

ヴァリニアーノ「邪教徒に対して効果がある筈だ。これを...」

女は珍しげに瓶を開け、中の水を飲んでしまう。

新左衛門・ヴァリニアーノ「アーーーーッ！」

女から慌てて瓶を取り上げ、吐き出させようとするが、女は飲み込んでしまう。

新左衛門「...飲んだ場合、どうなるのです？」

ヴァリニアーノ「...知る訳が無い」

女は、しかし平然として手を差し出す。

新左衛門「もっと飲みたい、と言っておりますが」

ヴァリニアーノ「...もう、ない」

女は、2人の男が嘆息しているさまを不思議そうに見ている。

そこへ、黒衣の僧たちが駆け込んでくる。

僧「崩れです！捕方が押し寄せて参ります」

ヴァリニアーノ「またか？信者たちを避難路へ導くのだ」

別の僧「避難路の側から邪教の手の者が侵入してきております。お逃げ下さい」

半之丞率いる捕方と、犬飼たちが切支丹たちを追い回している。

犬飼だけは、新左衛門のみを探している。

犬飼「どこじゃ新左！出て来い！」

ヴァリニアーノは新左衛門に刀を返して、自分は拳銃を用意する。

ヴァリニアーノ「ここはもう保つまい。その者を連れて行くがいい」

新左衛門「しかし」

ヴァリニアーノ「我ら死すとも主の元へゆくだけだ。お主らは、邪教の徒を斃せられよ」

牢より地下へ続く通路、その下の方から悲鳴が轟く。

葎江を伴って、武装集団が現れる。

葎江は得意げに道先案内を買って出たらしい。指を差し示し、

葎江「あそこです、あの牢にあります」

武装集団が放つ銃弾で、僧たちは次々に倒される。

ヴァリニアーノも拳銃で応戦する。

隙間を縫って、新左衛門は女の手を引いて上へと脱出を図る。

狭い通路に殺到する捕方を、切り伏せながら突き進む新左衛門。

その眼前に、狂気を宿した犬飼が立ちはだかる。

犬飼「新左！待っておったぞ」

新左衛門「犬飼…」

問答無用の漸撃を辛うじてかわし、青眼〔せいがん〕に構える新左衛門。

八双〔はっそう〕に構える犬飼。ジリジリと間合いを詰める。

女は2人の中間辺りに立ちすくんでいる。

犬飼「思い出すのう新左。あの時は儂とお主、どちらが明乃を娶〔めと〕るかの勝負じゃった」

新左衛門「手を引いてくれまいか」

犬飼「立ち位置、構えまであの時と同じじゃ。決着をつけようぞ、新左」

新左衛門「…断る」

犬飼は雄叫びを上げて切り掛ってくる。

受ける新左衛門。鏢〔つば〕迫り合いは、一進一退の攻防になる。

女の悲鳴に振り向くと、葎江が女の口を塞ぎ、武装集団共々通路の奥へ逃げて行く姿が見える。

新左衛門「待て！」

犬飼「新左アッ！」

新左衛門は犬飼を弾き飛ばして、女を追いかける。

犬飼も追い縋ってくるが、天井が崩れてきて通路が塞がれる。

犬飼「逃さぬ・・逃さぬぞ新左ア！」

山寺・門前（夜）

燃え盛る寺を遠巻きに見ている捕方たち。

意気消沈している犬飼。

半之丞が報告を受けている。

半之丞「港に不審船じゃと？」

手下「異国の密航船のようです。銃声や怪しげな荷駄を見た者がおりまする」

それを聞いた犬飼は馬に飛び乗り、独り猛然と駆け出す。

半之丞「待たれよ、犬飼どの！犬飼どの！」

港 ポルトガル船～船上（夜）

出航準備が整いつつある。

捕らえた女を前にして、喜びに浸っているオルガンティーノ。

その傍らでしなを作る葎江。

葎江「仰せの通りにございます。これで私も、かの地へ連れて下さいますね」

オルガンティーノ「(鬱陶しいが) まあ良からう」

そこへ銃声と悲鳴、蹄の音がする。

馬ごと乗り込んで来た新左衛門が、手下と切り合う様子が見て取れる。

洋刀を抜いて葎江に突きつけるオルガンティーノ。

オルガンティーノ「ここへ着いたら始末しておけと申し付けたであらう」



葎江「そんな...あのヴァリニアーノがいるなどと思いもよらぬこと。その場で捕らえられてしまったのです。そのような余裕は」

オルガンティーノは抗弁する葎江を突き殺して、そのまま海へ放り捨てる。  
船上に現れる新左衛門。馬を乗り捨て、ライフルを持つ手下を切り倒し、  
オルガンティーノを見つける。

新左衛門「オルガ！その女、返してもらおう」

オルガンティーノ「笑止。コレは元々お主などのモノではない」

新左衛門「邪教徒が」

オルガンティーノ「この地では、お主らもそう呼ばれてきたのであろうが」  
嘲笑を浮かべて虚無僧衣を剥ぎ取る。

西洋鎧姿になったオルガンティーノは、洋刀を振り翳して新左衛門に  
襲い掛かる。

女「...」

オルガンティーノの膂力〔りよりよく〕は凄まじく、新左衛門の剣は  
受けるので精一杯。

隙を見て足元を狙うのだが、鎧や盾に弾かれて、その後の大振り  
で薙ぎ払われてしまう。近づけない。

× × ×

船が港を離れつつある。

犬飼は馬に鞭を入れて加速し、ギリギリ飛び移ると、オルガンティーノの  
手下たちを切り伏せて船上へ向かう。

× × ×

左肩を深く切られて、オルガンティーノから距離を置く新左衛門。

血は止めようもなく、片手で刀を構える。

オルガンティーノ「非力な東洋の野蛮人め。又シらの信仰などまがいものよ。死んだと  
て主とやらの元へは行けぬのだ」

新左衛門「女を、どうする気だ」

オルガンティーノ「捧げるのよ。その母体からは新たな王が誕生し、容れ物となった供物  
は食い尽くされ、肉一片も残らぬ。そうしてよりのち、魔が君臨する素晴らしき世界が  
待っているのだ」

新左衛門「悪魔の世など、要らぬ」

切りかかるが、力押しされて弾かれ、腹を裂かれる。

皮一枚で済んだが、小瓶が落ちて船上を転がっていく。

女が小瓶を拾う。

追い詰められる新左衛門。

犬飼が手下を切り伏せつつ船上へ上がってきて、新左衛門を見つける。

犬飼「新左！神妙に致せ」

新左衛門「聞け！平四郎！コイツこそ、明乃どのを死なせた元凶ぞ！」

犬飼「なにい?!」

新左衛門「俺は仇を討つ。手伝え！」

犬飼は呆気にとられるが、頷いてオルガンティーノに切りかかる。

その隙に、新左衛門は女のところまで下がって息を整える。

左肩を襷で縛って止血する。

女は、小瓶の液体を飲もうとしている。

新左衛門「飲むな！」

女「？…」

新左衛門「それを奴に・・・いや、刀に零せ」

女は少し不満そうにしながら、瓶を傾けて刀をその液体で濡らす。

犬飼は死に物狂いでオルガンティーノに切りかかるが、ことごとく弾かれて劣勢。

新左衛門「平四郎、押せ！」

犬飼「新左、おのれ」

新左衛門は、落ちていた虚無僧衣を投げつけてオルガンティーノの視界を奪う。

犬飼は、盾を腕ごと切り裂く。オルガンティーノの絶叫。

新左衛門の上段からの一閃が、オルガンティーノの額を割る。

液体に浸した刀身が、異様な光に包まれている。

オルガンティーノの鎧や盾が溶け出し、瞬時に液状の塊と化す。

骨皮だけの貧相な醜姿になったオルガンティーノは、弱々しい断末魔と共に海へ落ちていく。

新左衛門「悪魔崇拝者…か」

犬飼が新左衛門に向き直り、八双に構える。殺気がみなぎっている。

新左衛門「よそう、平四郎」

犬飼「お主とは、ケリをつけねばならぬ」

やむなく応じる新左衛門。

片手の構えで刀を後ろへ逸らし、剣筋を見えないようにして腰を落とす。

犬飼は喜悦の色を浮かべてにじり寄る。

新左衛門「伝えておかねばならぬ」

犬飼「もはや無用。お主を切る」

新左衛門「明乃どのは、俺と同じよ」

犬飼「無用！」

新左衛門「切支丹だった」

犬飼「黙れ！」

新左衛門「明乃どのは終生、そのことで苦しんでおられた」

犬飼「黙れ！」

新左衛門「信仰を棄てるか、貴公に打ち明けるべきか、と。許されるはずも無いことに、苦しんでいた」

犬飼「黙れ！黙れ黙れ黙れエ」

怒涛の如く切り掛かる。

新左衛門は横に薙ぎ払って刀を返し、脇を狙う。

犬飼は不利な態勢から半身を振り、逆手に受けて鏢迫り合う。

新左衛門「同じものを、信じてみたかった」

犬飼「まだ、言うか」

新左衛門「...同じものを、見たかったのだ」

犬飼「...（押される）」

鏑迫り合いの中に、又ツと顔を出す女。

驚く男2人に笑いかけ、刀に掌を翳して小さく咳き始める。

女「塵は塵に、灰は灰に...」

二つの刀は溶け出し、一つの塊となる。

女が手を離すと、歪〔いびつ〕な塊は船上を転がり、海へ落ちていく。

新左衛門「...（啞然）」

犬飼「...（同じく、啞然）ん？」

女は、ニッコリ笑って犬飼を突き飛ばす。

犬飼は悲鳴と共に海へ落ちていく。

新左衛門「何をする？」

女が手を翳すと、幌が大きく風に靡き、船は加速していく。

女は新左衛門に抱きつき、倒れ込む。

新左衛門「離れぬか、おい？」

女はそのまま眠ってしまっている。

新左衛門「...あき、の」

優しく笑いかけ、そのまま目を閉じる。

船は勝手な方向へと進んでいってしまう。

五島 沿岸（朝）

木片と共に打ち上げられている犬飼。意識を取り戻し、起き上がる。

犬飼「ここは...」

海を見やり、辺りを茫然と見渡す。

やがて、水平線の彼方を見つめ続ける。

犬飼「...（自嘲するように口を歪める）」

当てもなく歩き出す。

穏やかな砂浜。

抜けるような青い空の下を、一步、また一步と歩いていく犬飼。

その先には、小船が一艘、ゆらゆら浮かんでいる。

犬飼「.....」

迷っていた足の向きを変えて...

了